学校・家庭・地域連携推進事業

「ともに考えよう　喜多方っ子の今・未来２０１２」講演記録

□日時　平成 24 年 12 月 1 日(土)13：00～
□会場　喜多方プラザ文化センター小ホール

基調講演

演題　「つながりが子どもを伸ばす」
講師　ＪＴ生命誌研究館　館長　中村　桂子　氏

１　プロローグ

今朝６時ごろに起きて新幹線でここまできて、まだ半日しかたっていませんが、喜多方に来てからの体験は盛りだくさんで、とても長い時間を過ごした気がしています。加納小学校のお話も、お弁当も、太鼓も･･･今、いろいろなものが混じって大変です。

しかも、その前に「喜多方市小学校農業科初冬献立」というお食事を頂きました。これが、すごい。訪問先でお昼を頂きますが、たいていどこも同じで楽しくありません。今日は違いました。献立をご紹介しますと･･･

一　会津郷土料理　こづゆ（駒形小学校　里芋）
一　ふろふき大根（加納小学校　大根）
一　白菜と豚ばら肉のやわらか煮（加納小学校　白菜）
一　会津名産　桜刺身
一　香の物　白菜漬け（加納小学校　白菜）
一　白　飯（熱塩小学校　コシヒカリ）

皆さんは、これらを普段あたりまえのように召し上がっているのでしょうが、これは会津ならではのすばらしい献立です。調理した方も名人だったのでしょう、本当に美味しかった。

人間の基本は「何を食べているか」で決まると思います。太鼓の指導の方が「みんな、頭がいい」とおっしゃっていました。見ていて、本当にそうだと思ったのですが、やっぱりきちんとしたものを食べていないと、こうはいかないでしょう。喜多方の皆さんには、当たり前の食事でしょうが、幸せなことだと思ってください。

正直、喜多方に圧倒されていますが、準備をしてきた話を聞いてください。

２　私と小学校農業科

今「食べる」事が一番の基本だと申しましたが、「食べる」ためには「食べる材料」が無くてはならないし、作らなくてはなりません。なぜ、これがとてもおいしいかというと、喜多方の人が喜多方で作って、喜多方で食べているからです。「食べ物が人間の基本だ」と申しますが、それがどこか遠くからくるものではあまりよくない。例えばマンゴーのように作れないものは、しかたがありませんが、全てがそうではいけません。基本は、自分で作って自分で食べるという事、それが出来ている喜多方は素晴らしいのです。

今の教育は、今申し上げたような形で、「人間をつくる」という基本が出来ていないと感じています。「お金をもうけることが人間の最大の目的だ」というような時代がありました。その時に、皆さんも覚えていらっしゃると思うのですが、小学校で新しく教えなければならないこととして「英語」と「コンピュータ」があげられました。しかも「コンピュータ」で経済、株の操作を教えるということでした。

「それが出来ていないから、日本はダメなんだ」というのでコンピュータで「経済を教えよう」、「株の取引を覚えさせよう」と言い始めた方達がいたのです。

その中で私は、「株を知るより、畑でカブを育てるほうがよっぽど大事だ」と、一人で訴えました。

それを日本経済新聞に「そんなことを言うのは、馬鹿だ」と言われるだろうと思いながら書いたのです。その思いを喜多方の方が受け止めてくださって、本当に嬉しかった。喜多方の市長さん、教育委員会、先生達、地域の人達が発展させてくださって、当初３校で始めたものが、今全校で行っていらっしゃる。素晴らしい体験をしている。私の一生の中でも、こんな良い思い出はないと思っています。

23 年度の作文コンクールの入選作を読みました。作文もずっと送っていただいています。最初の頃は、書く子どももそんなに多くなく、面倒くさい感があったようですけれども、今年は、「ほとんどの子が書いています」という報告です。全部、読ませていただきました。本当に、一人ひとりが素晴らしい。「教育をどうしようか」などと言わなくてもこれを読めばわかります。

全部すばらしい作品ですが、その中から少し紹介します。３年生の作文です。

ぼくは、エダマメを作りました。
シャワーのようなみずやりがとても楽しかったです。
エダマメに大きくなれよと話しかけました。
農業は最高です。

このたった４行の中にどれだけ多くのことが入っているか、わかると思います。エダマメに話しかけているのです。

作文の最初は「農業なんて嫌だ」と思っていたフシがあります。最後には「農業は最高です」と終わっています。本当にたくさんのことを学んだと思います。

４年生の例ですが

学校でとれた野菜を家に持ち帰ったとき、家族が「すごいね」と笑顔を返してくれました。一生懸命育てれば、育てるほど、おいしい野菜になり、みんなの笑顔が増えるなんて野菜作りにはすごいパワーがあると思いました。

これもすばらしい文章ですよね。喜多方の方法でいいなぁと思うところは、学校でとれた野菜を家に持ち帰って家族と食べているところです。お母さんは、子ども達が作った野菜だったら、一生懸命お料理するでしょうし「おいしいね」って言うでしょう。

野菜に「大きくなあれ」と言って野菜と良い関係ができて、そして、家では家族が笑顔になってくれる。良い関係が出来たわけです。

そのことを、この短い文章の中で４年生がみごとに表現しているのがすばらしいと思います。

５年生の作文にはこういうものがありました。

原発事故で、せっかく農家の人が苦労して野菜や米を作ったのに、出荷停止になるニュースを何回も見ました。喜多方のお米は安全ですごく美味しいです。福島県に来る人が増えるといいなと、この米作りで思いました。

お米を作るという事のほかに、社会全体のこと、そこまで考えが広がっているのです。小学校５年生で、普通ここまで考えるだろうか。ただ教科書を通して社会科で「原子力発電は・・」と教えただけでは、このように中から深い考えが出てくるとは思えません。５年生でここまで考えられるのはすごいことだと思います。

これは、６年生。

私達が育てた小豆を使って、赤飯を作り、一人暮らしのおじいさんやおばあさんにくばりました。泣いて喜んでくれた人もいて、そのことがとても心に残りました。

今、高齢化社会の問題があり、世代の関係がどうのとか、お年寄りを大切にしないとか言われています。そういうことは、いくら口で教育してもわかるものではありません。こうやって、自分の育てたものをお届けしたら、泣いて喜んでくれた人がいた、この子は、どれだけ成長したことかと思います。

たぶん先生方も、そんなに農業をご存知ではないと思うのです。特に若い先生方は自分でなさったことがないと思うのです。だから、「農業科」って言われたって困りますよね。自分に体験がないと。

やっぱり、そのとき頼りになるのが、地域の方々、地域のお年寄りの方々です。お年寄りの方も、これは「生きがい」になるのではと思います。文科省の制度でこういうことがあると「地域の方に報酬を…」という話になります。喜多方の方は「そんなもの、受けとれるか」っておっしゃっている、その意気込

みもすごいなと思います。

一番最初の時の作文に、

瓜を作った、自分が作った瓜はおいしくなかったけど、おじいさんの作った瓜は、ものすごくおいしかった。おじいさんはすごいと思った。とありました。・・・尊敬ですね。

今まで一生懸命に生きてきた人達に対する尊敬の気持ちが子ども達にあることは大事です。でも、口で「お年よりは大事にしましょう」といってもダメです。自分が一生懸命やってもできなかったことを、みごとにやってしまうおじいさんを見たら自然に尊敬します。

だから、これは単に食べ物を作るという事だけではなくて、「人間としての基本」を造っているのです。喜多方から送られてくる作品集が楽しみで、日本の各地でこのような取り組みが広っていけばよいと思います。農業科副読本も大変に人気があるそうですから。

昨年の災害以来、このような教育が大切と思う人が多くなりました。東京で「株の教育」と言っていた人達も、去年から少し変わってきました。

農業科を、きちんとやっていくことが、本当の人間関係を作り、尊敬を生み、すばらしい子ども達を育てることになるとみんな気がついてきました。喜多方が素晴らしいことは、充分わかりました。これがもっともっと日本で広がってくれたらよいと思っています。

３　心とつながり

そこで私が思ったのは、「心」とはなにかです。心は大事と言われます。

モノでしたら、「物は大事だ、壊さないでおこう、どこかにしまっておこう」と、よくわかるのですが、心はだいたい何処にあるか分からない。

脳の研究が進み、心は脳にあるとも言われます。昔は、心は心臓の辺りにあるとされていました。

私は、心は、どこか身体の中にあるものではないと思っています。身体の中にあるのだとしたら、「猫に心はあるの？」、「ダイコンに心はあるの？」って言われたとき、猫には少しあるかもしれないけれど、ダイコンには心はないと思います。

心は「間にあるもの」だと思うのです。「ダイコンには心はあるのか」と聞かれたら、シッポのほう上部のほうと探してもなかなか探せません。ですが、先ほど私は「ふろふき大根」への想いが湧きました。「こんなおいしい大根ないな」と。東京のスーパーマーケットでは、あんなおいしい大根は売っていません。ですから、私の心は大根に惹きつけられてしまいました。

もちろん、人間との間だったら家族、お友達の間に心があります。モノに心があるとは誰も思いません。でも、ずっと使ってきたマグカップが欠けたら、

悲しいですね。その中に自分のいろいろな気持ちが入っているからです。

だから心は実は、「間にある」のだと思います。関係ですね。家族と一緒に食べて、「おいしいかったね」と言う。この大根は、加納小学校の生徒さん達が「みんなで一生懸命作った」という気持ちがあるから私に美味しさが伝わるのでしょう。

そのような形で、心はすべてとの「間にある」と思います。そのような関係であれば、心は世界に満ち満ちるはずなのです。

心を保つためには、「関係」とそれからもう一つ「時間」が必要だと思うのです。「忙しい」いう字は、「心」へんにつくりが「亡くなる」と書きます。忙しければ心は亡くなるという意味です。時間がゆったりしていないと心は生まれない。

先ほど小学生がお米づくりの話をしてくれましたが、お米づくりは１年かかります。機械だったら、競争して、「あちらは１年で作るものを、私は１週間で作るよ」ということだってできないことは無い。

お米は、みんなで一年かけてじっくりと作らなければならない。先のことを考えてつくるのです。これは、人間にしか出来ないことです。生き物の研究をしていますと動物も人間よりすごいことができます。でも、どんなに素晴らしい動物にも決してできないことがあります。人間にしか出来ないことがあるのです。それは、「想像すること」です。今、ここにいない人のことを考えたり、過去や未来を考えたりすることです。

「春に蒔いた種で、秋になったらお米が実る」だから一生懸命やろうとする。ゆっくりした時間を持つのが農業だと思います。工業では、早く作れることが勝ちだという事になりますが、農業は全員が春種を蒔いたら秋までしっかり育てましょうとなります。誰がおいしく出来るかという競争はあるけれど、「早く」という競争はありません。時間を大事にするということも心です。「時間」と「関係」が大事です。

今日の題、先ほどから皆さんの中からも出てきた「つながり」は正に「時間」と「関係」です。間に心があってつながっているものです。横のつながりと同時に、昔からお年寄りがいて、自分がいてと縦につながる「時間のつながり」があります。これが、しっかりと流れて行かないと「生きている」という事になりません。「つながり」が一番基本にあると思います。喜多方には「つながり」が満ち満ちているというのが、私の実感です。

４　もう１つのつながり

喜多方のことをお話して来ましたが、農業によって「つながり」を考えているもう１つの例、私が一緒に体験している場所をご紹介させてください。

「つながりのなかに自分がいる」

この言葉は、私が書いたものではありません。「新田Ｅプロジェクト委員、１年目の歩み」という新田小学校の小学生が書いた報告書です。

「つながりのなかに自分がいる」という言葉は、１年を通して農業を体験した小学生が、誰が教えたわけでもなく、自分達の経験したことを表現した言葉です。

新田小学校は、兵庫県豊岡市にあります。コウノトリの里です。日本から野生のコウノトリがいなくなってしまったのを呼び戻そうという活動を続けているところです。豊岡市には那賀川という大きな川があり、よく氾濫します。今から、５年前でしたか、洪水で学校も子ども達の家も、床上浸水の被害を受けました。その時、近隣の人達が、今回の震災の時もそうだったように、とても親切にしてくれました。それで、新田小学校の生徒達は、「人に親切にするということは、こんなに素晴らしい」と感激したのです。被害が収まった後に、自分達も何か「親切にしよう」ということになりました。

そこで、コウノトリに親切にしようと決めたのです。学校の前の田んぼを借り、そこをコウノトリの田んぼにしました。コウノトリのための田んぼですから、農薬は使えません。とても手間がかかります。大変なことです。

まず、魚道を作らなければ、ドジョウなどの生物が上がってきません。その整備には 30 万円かかるのだそうです。お小遣いを集めても 30 万円は無理。「じゃあ、自分達で作ろう」ということになりました。

森林組合に協力を求めにいきました。森林組合は生徒達の熱意にうたれて、魚道を作る板を提供し、作業を手助けしてくれたのです。

魚道は完成しました。田んぼに水を張ると、コウノトリが早速やってきてくれました。生徒達は、コウノトリのため、田んぼに生き物を呼び寄せるために、生き物や土壌の調査をします。このように生徒達は、自分達で考え、行動しました。

その田んぼで取れたお米をどうしようと考えた結果、子ども達に食べて欲しいと思いました。「これを学校給食に使ってください」と市長に直談判しました。このお米は「コウノトリ育む米」といって高価なのです。「２ヶ月に３回なら…」と、学校給食で提供されることになったのです。

一連の体験を通して、子ども達は、「米は作るだけではだめなんだ。誰かに食べてもらう、食べてくれる人がいるから作る意味があるんだ」という事に気付きます。こうして経済も学びました。消費が大事だと知ったので、そのあとコンビニまで乗り込んだりするのです。何も大人は教えていません。

「コンピュータの中のカブよりも、畑のカブのほうが･･･」といった私の考えは正しかったと確信しました。彼らは、体験を通して、生産と消費という事を自分達で学んでいます。

５　生きる力とは

「大人が変わると子どもが変わるとよく言われますが、違いますね。子どもが変わると大人が変わるんです」豊岡の大人の言葉です。喜多方も同じではないでしょうか。

豊岡の子ども達と関わるうち学んだことがあります。以前、文科省のお手伝いをましたが、文科省が、子ども達につけたい力は「生きる力」だといっています。「何を生きる力とおっしゃるんですか」という質問には、官僚の方は誰も答えられません。

私は、農業をやっている子ども達を見て、これが「生きる力」なんだと思いました。

１つは、素敵な「笑顔」をみんな見せてくれます。農業をやりながら仏頂面している人はいません。とっても笑顔がよくこちらも笑顔になります。

２つ目は、自分で考えて行動します。その結果、「交渉能力」が付きます。自分がやりたいことがあれば、自分で考えて行動する。さっきの豊岡の場合もそうですが、自分がやりたいからこうさせてくださいといった能力が喜多方でも伸びているのではないかと思います。

３つ目は、「コミュニケーション能力」です。お話しする能力です。今日のプレゼンテーションも素晴らしかったですよね。豊岡の子ども達もプレゼンが得意です。そのプレゼンを見た教師が、「どうしてきみ達はそんなに上手に発表出来るのか」と質問しましたが、豊岡の子ども達は「自分達で考えて自分で行動しているからだ」と答えました。「言われてやってるんじゃない、嫌々やってるんじゃない、自分で考えて自分がやったことを話すのだからちゃんと話せるに決まってんじゃない」という子どもの当然の答えでした。明らかにこの能力がついていました。

実は、企業の社長さん達、就活の時に若い人たちの能力として何を見るかと言いますと「笑顔が出来るか」ということと、「交渉能力があるか」ということと、「コミュニケーション能力があるか」ということだそうです。「農業をやった子はこんな能力があるんですよ」と言ったら、「すぐ採用しましょう」と言われました。「小学生だからちょっと待ってください」と申し上げたのですが、これは人間としての一番の基本能力だと思います。

６　生き物に便利さを当てはめる現代

農業の素晴らしさをご紹介しながら、「つながり」ということ、人、生き物、モノすべてのつながり、時間のつながり、ということを申し上げました。私の仕事柄、これをもう少し広げて、お話します。

私の仕事の生命誌を描いた生命誌絵巻を見てください。

生 命 誌 絵 巻

原案：中村桂子　　協力：団まりな　　絵　：橋本律子　　提供：JT 生命誌研究館

生命誌の提唱者、中村桂子（ＪＴ生命誌研究館館長）が一つひとつの生きものがもつ歴史性と多様な生きものの関係を示す新しい表現法として考案した図。
扇の要は、地球上に生命体が誕生したとされる３８億年前。以来、多様な生物が生まれ、扇の縁、つまり現在のような豊かな生物界になった。多細胞生物の登場、長い海中生活の後の上陸と種の爆発など、生物の歴史物語が読み取れる。

人間、動物、昆虫、植物、バクテリア･･･地球上には数千万種類の生き物がいます。いろいろな生き物がいるということが大事なところなのですが、これがバラバラで個々の生命体ということではありません。現代生物学は、どの生き物もすべて細胞でできており、その細胞の中にはＤＮＡが入っていることを明らかしました。

キノコも人間も同じＤＮＡが入った細胞で出来ているなんて、偶然であるはずがありません。そこで、私達は、１つの祖先から、人間は人間に、キノコはキノコになってきたのだと思っています。

38 億年前、海の中で祖先の細胞が生まれました。キノコと人間のＤＮＡを調べて、「ここが同じ、ここは違うね」と比べ、人間特有のものは何処だろうと研究するのが私の仕事です。

38 億年という時間をかけて地球上の生き物達みんなが、お互いに関係しあいながら、つながりながら、お互いそれぞれ自分らしく生きるという世界を作ってきた。それは、どんなふうにできてきたのか、生き物達はみんなどんな関係

があるのかを知りたくて、生命誌の研究をしています。

喜多方での「お年寄り」と「子ども達」のつながりも、実は、38億年という前からの（6年生の教科書にそのことを書きましたが）つながりの一つです。長い時間があって今がある。

現代の社会は、「人間はこの扇の外にいる」と思って出来ています。「生物多様性って大事だね」と言うけれど、私達は特別だから原子力発電所を作ったり、便利にお金をもうけたりして暮らしていけばいいのだと考えている。他の生物と自分は別だと考えている。そういうシステムになっています。

農業はこれでは出来ません。人間は扇の中にいるのです。生き物の一つなのです。農業をやるという事は、単に食べ物を作るということだけではなく、実は、38億年という長い時間を他の生き物と共有して本当につながっていることを知ることなのです。人間だけは、想像力など独特のものがありますから、それを使っていいのです。加納小学校の皆さんも「機械使うと便利だよね」と言いました。機械を使っていいのです。機械を使っていけないとは私は思っていません。しかし、「生き物の仲間」という事を前提にしながら機械を使う。めちゃくちゃ勝手なことはしない。農業をやることによって、「機械って便利だよね」と思うけれど、たぶん小学校の生徒さん達は、こういう生き物達とのつながりということはわかっているので、その機械をただめちゃくちゃに使おうとは思わないでしょう。そういう学びが出来るのだと思います。

機械は便利で、便利は良いわけです。便利は早くできて、手が抜けて、そして、思い通りに出来る。機械はこれを全部やってくれます。農業でも機械は便利で良いのです。しかし、「機械を使えば思い通りに農業が出来る」ということではありません。生き物は、早くは出来ません。稲は春に種を蒔いたら、みんな秋に実るのです。手が抜けるかと言ったら手は抜けません。手を抜いたら育たない。その結果、思い通りに出来るかと言ったら思い通りになりません。生き物は違うのです。便利を否定しているわけではありませんが、便利を生き物や人間にまで当てはめるのが現代なのです。それは止めましょう。

７　２１世紀は命の時代

教育もそうです。「早く出来る子、思い通りの子」が良い子だということになってしまう。生き物はそうではありません。機械は機械で機械らしく使って行けば良い。そこが逆になってしまって、人間まで機械と見るような社会になり、教育になっている。これは違います。人間は生き物なのですから。

農業を基本にした体験から人間を生き物として見ていくことが教育でもとっても大事だと思います。

20世紀は機械の時代でした、今家にあるもので、私が子どもの頃にあったものは、ラジオぐらいです。それ以外は全部最近になって出てきたものです。電

子レンジもＤＶＤも携帯電話も、パソコンもみんなそうです。それはそれで否定することはない。しかし､「人間まで機械のようにならなくてもよいでしょう」と思います。

だから､「21 世紀を命の時代にしてその中で機械を使いこなしましょう」と申し上げたいのです。

生き物と機械を比べます。例えば、４トントラック。たくさんの荷物を運べますが、あの４トントラック、自分も４トンあるのです。４トンあるので４トン運べる。ところが、蟻を見ますと、蟻の一匹の重さは、1000 分の２グラムなのだそうです。少し大きな蟻でも 1000 分の５グラム。この蟻が、どのぐらいのものを運んでいるかを見ると 1000 倍は平気ですね。すごいと思います。

私は、機械を否定していません。機械の出来ることは素晴らしいけれど、生き物をよく見ているとそういう面でもとっても能力があります。ただ早いとかいう面だけ見て生き物より機械の方がすごいねと思わないことです。

生き物の特徴を一つの例でお話しします。

生き物から学ぶことはいろいろあります。ナミアゲハは、ミカンの葉にしか卵を産みません。幼虫がミカン、かんきつ類の葉しか食べられないからです。

ナミアゲハのお母さんは、どうやってミカンの葉を認識しているのか？不思議に思って調べました。チョウは、葉っぱに止まると前足で、葉の上をトントンと叩く、ドラミングという行動をします。叩くと葉の表面が傷つき、中から葉の成分が出てきます。それを前足にある感覚毛で見分けているのです。この成分を感じる毛の細胞はチョウの脳につがって、その成分を伝えます。

私達は、舌で味見をします。舌には「味蕾」という細胞があり、ここで味を感じます。実はチョウの足の毛の細胞は味蕾と全く同じ構造です。チョウの前足と私たちの舌が同じ働きをして味を見分けることが出来る。本当に仲間だ、本当につながっているということですね。

そういう形で生き物から「つながり」を学んでいます。農業をやりながらおじいさんとつながったり、大根とつながったりという感覚のつながりと同じです。

科学でわかるつながりも入れて学んでいくことが大事です。科学は心の無い冷たいものではなく、新しい知識が「本当につながっているんだね」ということを教えてくれるのです。心と科学は別ではありません。科学嫌いにならないでください。

８　生き物として人間はいかに生きるべきか

人間は生き物であり、自然の一部なのです。だから、どんなに進んだ社会になり、テレビや携帯電話があっても、私たちが機械のようにならず、機械にのめり込んでしまわないことです。「自分は生き物で自然の一部なんだ」というこ

とを忘れないことです。

去年の大きな震災を経験して私達は「何とちっぽけな存在なんだ」「自然は何と大きいんだ」と身につまされました。生き物で自然の一部だということが身につくようにすることが教育の基本だと思います。

「あなたは生き物なのよ」「自然の一部なのよ」と口でいくら言っても伝わりません。『体験』です。農業をやったり、お弁当を作ったり、太鼓を叩いたり、心に響くことから子どもたちは成長していくのだと思います。

もう一度、申します。38億年前に地球に生き物が生まれてから一度も絶えることなく続いてきたのです。この大変な地球の中で、津波や洪水があり、凍ることもあった中でも絶えることなくずっと続いてきたというのは、生き物のすごさだと思います。そのすごさがみんなの体の中に入っているのです。細胞として、ＤＮＡとして。

そうだとしたら、それを生かしてこの中で生きてゆくという事は、決して後退することではありません。農業の話をすると「昔に戻れ」と言っているように聞こえるのですが、そうではありません。自然を、津波などの大きな自然を十分に知ったうえで、しかも、他の生き物たちと違う想像力を持つ人間として、どうやって生きていくかということは、21世紀の大きなテーマだと思います。

そのテーマにむけて「何をやるの？」と言ったら「いかに生きるべきか・・・」と腕を組んで考えているよりは大根を作ったほうが答えは見えてくると思っています。

喜多方に農業科が出来たこと、すばらしい展開をしていることは未来につながります。これからもっと、もっと、もっと大きく展開して行って欲しいとつくづく思いました。期待しています。